

第76回西日本医科学生総合体育大会の運営総括と課題： 学生主体大会の持続可能性に向けた提言

岡本安雄¹⁾，米戸健浩²⁾，氷見直之³⁾，加藤直子²⁾，弓取美華²⁾，
岡田光弘²⁾，林 恭子²⁾，森本裕文²⁾，砂田芳秀⁴⁾

- 1) 川崎医科大学薬理学教室
2) 川崎医科大学事務部学生課
3) 川崎医科大学生理学2教室
4) 川崎医科大学学長

(令和7年7月24日受理)

The 76th West Japan Medical Students' General Athletic Meet: A Review of Operations
and Challenges – Proposals for the Sustainability of Student-Led Competitions

Yasuo OKAMOTO¹⁾，Takehiro YONETO²⁾，Naoyuki HIMI³⁾，Naoko KATO²⁾，
Mika YUMITORI²⁾，Mitsuhiro OKADA²⁾，Kyoko HAYASHI²⁾，
Hirofumi MORIMOTO²⁾，Yoshihide SUNADA⁴⁾

- 1) Department of Pharmacology, Kawasaki Medical School
2) Student Affairs Department, Kawasaki Medical School
3) Department of Physiology 2, Kawasaki Medical School
4) President, Kawasaki Medical School
(Accepted on July 24, 2025)

抄 録

西日本医科学生総合体育大会（西医体）は医学生主体で運営される歴史ある大会である。第76回大会は川崎医科大学が40年ぶりに主管し、参加者18,210人、22.7億円の経済波及効果を生むなど成功裏に終了した。一方で、猛暑下での安全管理や医学教育の変化による学生負担の増大、宿泊分散、参加者のモラル低下など多様な課題も浮き彫りになった。アンケート分析と大会運営の総括を踏まえ、今後は教職員や地域との連携強化、運営支援体制の整備、開催時期の見直しが必要と考える。西医体の価値を未来へつなぐ持続的発展策を提案する。

キーワード：西日本医科学生総合体育大会、アンケート、持続可能性

Abstract

The West Japan Medical Students' General Athletic Meet (Nishi-Itai) is a historic competition primarily operated by medical students. The 76th Meet, hosted by Kawasaki Medical School for the first time in 40 years, concluded successfully, attracting 18,210 participants and generating

an economic impact of 2.27 billion yen. However, various challenges also came to light, including safety management under intense heat, an increased burden on students due to changes in their medical education, dispersed accommodation, and a decline in participant morale. Based on an analysis of participant surveys and a comprehensive review of the event's operations, we believe it's crucial to strengthen cooperation with faculty, staff, and local communities, develop a robust operational support system, and reconsider the timing of the event. We propose these measures to ensure the sustainable development of Nishi-Itai, preserving its value for future generations.

Key words: Nishi-Itai, Questionnaire survey, Sustainability

はじめに

西日本医科学学生総合体育大会（以下、西医体）は、1949年に医学生による自主運営のもと創設された、歴史と伝統のあるスポーツ大会である。本大会は、医学を学ぶ学生が勉学の傍らスポーツ活動を通じて交流を深め、心身を鍛える貴重な機会を提供してきた。現在では、西日本地域の44大学から約18,000人の医学生が20競技にわたって参加する大規模なイベントへと発展している。

しかし近年、西医体を取り巻く環境は大きく変化している。新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年から2022年の3年間（2020年：鳥取大学、2021年：鹿児島大学、2022年：浜松医科大学）は大会が中止となったが、2023年に大阪大学の代表主管で再開された^{1,2)}。さらに2024年には川崎医科大学が40年ぶりに代表主管を務め、「あつ晴れ！西医体」をキャッチフレーズに掲げ、第76回大会を岡山県内各地で開催した。本大会では参加者18,200人が14日間にわたって熱戦を繰り広げた（図1、図2）。

このような大規模大会を医学生主体で運営する中で、現代社会ならではのさまざまな課題に直面している。たとえば、近年は医学教育カリキュラムの一層の密度化（CBT・OSCEの公的化や臨床実習の負担増）により、学生が運営に割ける時間が制約されている。また大会規模の拡大に伴い、資金管理やスポンサー対応、参加者の安全管理といった専門性の高い業務が増

え、学生だけでは対応困難な領域が広がっている。さらに、異常気象による猛暑は熱中症やけがのリスクを高め、安全管理の重要性を一層浮き彫りにしている。

第76回大会の開催にあたり、40年前の主管パンフレットに運営委員として関わられた本学総



図1 第76回西日本医科学学生総合体育大会ポスター



図2 第76回西日本医科学学生総合体育大会の様子

合医療センター石田敦久先生からは、決起集会において現運営委員へ温かい激励のお言葉を頂戴した。お忙しい中を後輩のために駆け付けてくださったことに心より感謝申し上げたい。その際、40年前の主管を記念した石碑が総合体育館前に設置されていることをお聞きし、関係者で拝見する機会を得た（図3）。第76回大会

は、学生たちの熱い闘いの舞台として成功裏に終了した^{3,4)}。

本研究は、西医体の持続的発展に資することを目的に、第76回大会の運営について総括し、大会に関する参加者アンケート結果を分析する。これにより、学生主体で運営される西医体の強みと、現代的な制約下での課題を可視化する。最終的に、今後も医学生にとって価値ある大会であり続けるために必要な提言を提示する。

アンケート調査対象・方法

第76回大会の運営状況および参加者の評価を多角的に分析するため、大会閉幕後の2024年8月15日から9月30日までの期間にわたり、オンラインアンケートを実施した。本研究は川崎医科大学・附属病院倫理委員会（承認番号：6663-00）の承認を受けている。本アンケートの対象は、第76回西日本医科学生総合体育大会の全参加者（約18,210人）とした。アンケートは無記名式であり、Google フォームを用いて作成し、大会出場の高揚感が残る大会日程の後半から開始した。各種目の競技責任者からグループLINEにより参加チームの部長に通知し、チーム内の選手・マネージャー等参加者全員に拡散・参加を呼びかけるとともに各参加大学の担当者を通じて広く周知するなど多く



図3 40年前の主管を記念した石碑

表1 学生に対するアンケート調査項目

調査項目	
1. 大学名	8. 宿泊日数（観光のため）
2. 競技種目	9. 交通費の総額
3. 氏名	10. 宿泊・飲食費の総額
4. 区分（選手、マネ、監督等）	11. お土産代の総額
5. 第76回西医体・全体の満足度・理由	12. その他費用の総額（衣服や用具代）
6. 第76回西医体・運営上の満足度・理由	13. 訪れた観光地
7. 宿泊日数（西医体のため）	14. その他自由記載

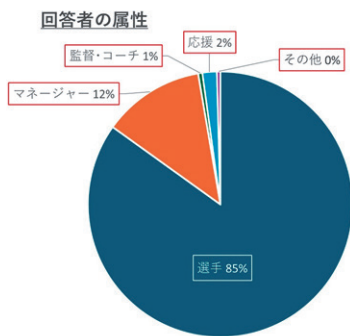


図4 アンケート回答者の属性

の参加者からの回答を促した。結果、参加者の6.3%に及ぶ1,152件もの回答が得られ、統計的には誤差 $\pm 3\%$ となる高精度なサンプル数を獲得した。

回答はGoogleフォームに連携したスプレッドシートで集計し、一次締切、二次締切を設け、回答意欲を誘引した。

アンケートでは表1に示す項目について調査を行い、選手をはじめ幅広い参加者から回答を得た(図4)。調査内容には、大会全体および各競技運営に対する満足度、地域経済への波及効果の認識、大会運営上の課題認識などを含めた。経済波及効果の計算には、総務省公表の「2020年産業連関表による経済波及効果・簡易計算ツール」を用いた⁵⁾。さらに、第76回大会の運営全般について総括し、学生主体運営における具体的な課題や工夫、教職員の関与状況に関する質的情報も抽出した。これらの分析を総合的に行うことで、大会運営の全体像を把握し、西医体の持続的発展に向けた提言を導き出した。

結 果

大規模イベントの準備は多岐にわたるが、特に初期段階の会場・競技場の確保は最重要である。川崎医科大学では40年ぶりの主管にあたり学園の理解を得て、学生課に専任担当者を2年

半前から増員配置し、体制を強化した。この担当者は偶然にもおかやまマラソンなど大規模地域イベントの運営経験を有しており、学生の負担軽減に寄与しながら準備を進めた。

西医体の会期は2年前に16日間と指定されていたが、高学年の実習との兼ね合いから、より多くの学生が参加できるよう、当初は12日間に短縮し、交通の便が比較的良好な岡山市および倉敷市の会場確保を優先して調整した。真夏の開催では、地域のジュニア層(中高生)が夏休みに行う大会と競合することが予想されたため、地元スポーツ協会や関係競技団体に初期段階から丁寧に説明し、理解を求めた。また、競技によっては審判員の派遣についても並行して調整を進めた。

しかし、会場の広さ不足やお盆時期における審判員確保の難しさから、最終的に会期を14日間に延長し、新たに3種目について本学総合体育館とテニスコートを会場として追加した。これに伴い、学園の配慮により総合体育館の空調設備やテニスコートの照明・水道設備の更新を前倒しし、約3,500万円を投じて改修整備を行った。

また、真夏の大会における熱中症対策は特に重要であり、初期段階から地元観光協会や企業へ働きかけ、多くの協賛や協力を得ることができた。観光協会からの補助金、服飾メーカーからの空調服(電動ファン付きベスト)、製菓会社からの塩分チャージタブレット、大手飲料販売会社からのスポーツドリンクの提供に加え、製氷会社と冷凍輸送会社の連携により屋外会場に仮設冷凍倉庫を設置して大量の水を提供するなど、熱中症対策を強化した。さらに、特別名勝「岡山後樂園」の特別入場券や、地元ジャズ団体から提供された倉敷帆布製の特製コースターを記念品として配布するなど、おもてなし企画も実施した。

第76回西医体の概要としては、開会式を2024

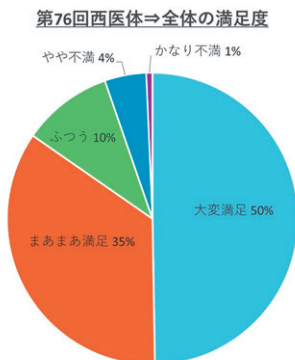


図5 アンケート結果：全体の満足度

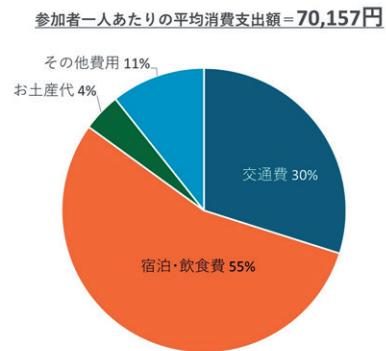


図7 アンケート結果：参加者一人当たりの平均消費支出額

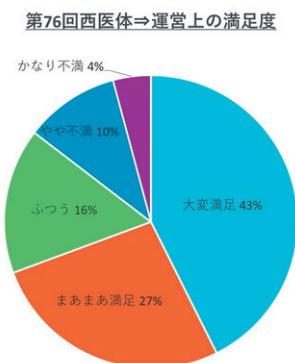


図6 アンケート結果：運営上の満足度

年8月3日に倉敷アイビースクエアで行い、競技は8月5日から18日までの14日間にわたり開催された(表2)。会場は岡山県内17競技、広島県内2競技、兵庫県内2競技で、参加大学は44校、延べ18,210人に及んだ。総合成績は優勝が岡山大学、準優勝が岐阜大学、第3位が愛媛大学であり、本学は第31位であった。

本研究で得られた主な結果は以下のとおりである。まず、第76回大会の会期は西日本44大学のカリキュラム調査に基づき、3万人以上の学生のうち85%以上が参加可能となるよう設定した。その結果、総エントリー数は20競技で18,210人に達した。アンケート調査では、大会全体の満足度が85%(図5)と高評価だった一方で、競技運営に関する満足度は70%であった(図6)。

次に、西医体の経済波及効果については、参加者一人あたりの平均消費支出額(宿泊費・交通費・飲食費・物販等)を70,157円と算出し、総額で22.7億円に上ると推計された(図7)。この規模は国民スポーツ大会に匹敵すると評価され、地方都市における地域経済の活性化に大きく寄与したと考えられる。

一方で、大会運営に関する課題も明らかになった。第一に、CBT・OSCEの公的化や臨床実習の負担増といった医学教育カリキュラムの変化により、学生が大会運営に割ける時間が制約されている点である。第二に、大会規模の拡大に伴って、資金管理の複雑化やスポンサー対応、安全対策の強化など、学生にとって負担の大きい業務が増加している。特に、連日の酷暑によって熱中症や練習不足による事故のリスクが高まったことが課題として挙げられる。

安全対策に関しては、怪我62件(前年54件)、熱中症53件(前年51件)、重大事故1件(前年0件)が発生した(図8)。入院5名(骨折2件、熱中症・脳震盪・複視眼振各1件)、手術1名、1週間以上の通院3名、骨折は11名(ハンドボール3件、サッカー・空手・ラグビー各2件、野球・バスケ各1件)、熱中症は53件、うち病院搬送13名、重症は1名であった。重大

事故としては、ラグビー3回戦でのタックル転倒により脳震盪と診断され、ドクターヘリで指定病院へ搬送・入院（現在もリハビリ中）となった事例があった。

気象庁の発表では、2024年の日本の平均気温は統計開始以来最も高く、2年連続で記録を更新した。さらに近年の上位6年はすべて2019年以降に集中しており、酷暑化の傾向は顕著である。岡山市では会期中の12日間すべてが、倉敷

市では14日間のうち12日が最高気温35℃以上の酷暑日となっており、熱中症対策の重要性は一層高まっている（図9）⁶⁾。今大会では、サッカーの試合時間を炎天下を避ける時間帯に変更するなど対策を講じたが、熱中症対策費については西医体会計単独での予算化を含めたさらなる検討が必要であると考えられる。

第三に、一部競技（ボート、ヨット、合気道）では参加大学が少なく、主管大学に負担が偏重しやすい傾向がみられた。さらに、参加人数の多さに対し十分な宿泊施設を確保できず、宿泊地が分散してしまうという課題もあった。

第四に、水泳競技のレセプションにおける複数の迷惑行為により会場ホテルから損害賠償を求められる事案が発生した。これについては直ちに水泳競技の運営学生と西医体連盟理事長が謝罪訪問し、後日弁償金を支払った。また、バレーボール競技では、大量のゴミが帰りの路線バス車内に袋ごと放置され、運行会社から激しい抗議を受けたため、本学職員が謝罪訪問を行った。これらの行為は大会の社会的評価や継続性に悪影響を及ぼす可能性があり、今後は再発防止に向けた適切な指導および行動規範の明確化が求められる⁷⁾。

第76回西医体 事故概要

競技	怪我	熱中症	胃腸炎	計
硬式テニス		11		11
ソフトテニス		12	1	13
サッカー	10	3		13
準硬式野球	4	1		5
バスケットボール	6			6
バレーボール		2		
バドミントン	6			6
柔道	2			2
ボート		8		
陸上競技	1	11		
ヨット		3		3
合気道	1			1
空手道	4			4
ハンドボール	12	1		13
ラグビー	15	1		16
ゴルフ	1			1
合計	62	53	1	94

図8 第76回西日本医科学生総合体育大会の事故概要

第76回西医体・会場 酷暑日の状況

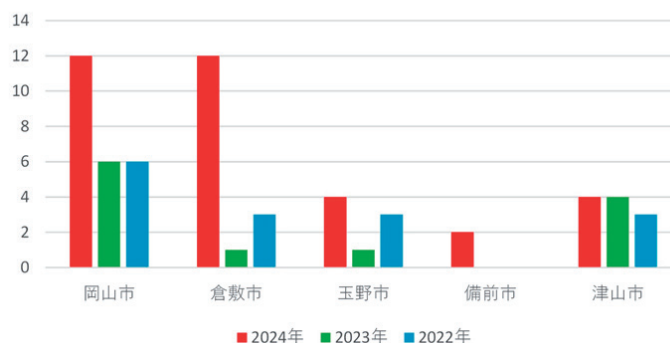


図9 第76回西日本医科学生総合体育大会期間中の酷暑日の状況

考 察

本研究の分析により、西医体は、医学生にとって自治や協力、責任感を育む非常に貴重な機会であることが再確認された。第76回大会は、コロナ禍による中断からの再開、そして川崎医科大学が40年ぶりに代表主管を務めるという特別な状況下で開催された。大会全体の満足度は85%、競技運営の満足度も70%と高い水準を維持し、さらに22.7億円の経済波及効果を生んだことから、運営が成功裏に行われたといえる。これは国民スポーツ大会に匹敵する規模と評価されている。

一方で、今回の大会運営を通じて、西医体の持続的発展に向けたいくつかの重要な課題も浮き彫りになった。近年、医学教育における試験制度（CBT・OSCEの公的化）の変化や、大学間のカリキュラムの差異、さらに臨床実習の負担増加により、学生が大会運営に割ける時間が大きく制約されている。加えて、大会規模の拡大に伴って、資金管理やスポンサー対応、参加者の安全管理など、専門性の高い業務が増え、学生だけでは対応困難な領域が広がっている。

このような状況を踏まえ、西医体のガバナンス体制の見直しは喫緊の課題である。第一に、学生の負担増大と専門業務への対応が挙げられる。医学教育カリキュラムの変化は、学生が大会運営に割ける時間そのものを減少させている。また、大規模イベント運営に不可欠な資金管理、スポンサー対応、広報、安全管理といった専門性の高い業務は、学生団体のみで全てを担うには限界がある。このため、ブロック間の連携強化による特定の主管大学への負担集中を避け、大会運営の責任を分散させることが重要である。具体的には、各競技の主管を複数大学で分担することや、より広範な地域連携を推進することが考えられる。また、警備、会場設営、一部の広報業務など、学生が行うには専門性が高く、かつ負担の大きい業務については、

積極的に外部委託を検討することで、学生が大会本来の企画・運営に集中できる環境を整えることが重要である。

第二に、コンプライアンスの徹底と法的な責任の所在の明確化が不可欠である。前回大会では、複数の運営委員に対して医療系情報企業から接待のアプローチが繰り返され、コンプライアンス上の注意喚起を行った事例も報告された。業界にとっては、将来の医師約18,000人の名簿は魅力的に映ると考えられ、このような不適切な接触は、個人情報保護法（例えば、学生の個人情報の不適切な利用や提供）や景品表示法（不当な利益供与や景品表示）などの関連法規に抵触する可能性をはらんでいる。今後は、このような業者との不適切な接触を未然に防ぐため、倫理規定を含むガイドラインや内部規則の整備を急ぐとともに、学生運営委員に対するコンプライアンス研修を定期的 to 実施し、具体的な事例を交えながら法的なリスクについて周知徹底する必要がある。また、第76回大会では、水泳競技のレセプションにおける迷惑行為や、バレーボール競技でのゴミ放置といった参加者のモラル低下に起因する問題が発生し、会場ホテルへの損害賠償やバス事業者からの抗議を受ける事態となった。これらの行為は、大会の社会的評価や存続自体にも深刻な悪影響を及ぼす可能性があり、主催者としての法的責任（例えば、施設毀損に対する損害賠償、清掃費用負担など）を問われるリスクも内包する。学生主体という特性は尊重されるべきだが、大会運営を統括する西医体連盟および主管大学は、管理者としての注意義務を負う立場にある。したがって、今後は、大会参加者に対し、事前に各大学の「学生の行動規範」を含む明確な行動基準を周知し⁷⁾、違反者に対する厳正な措置を講じることを明示するなど、再発防止に向けた指導体制の強化が求められる。これは、学生個人の行動が、大会全体の法的・社会的責任に

繋がりをいう認識を促し、ひいてはプロフェッショナリズムの醸成にも繋がる。

第三に、安全管理体制の強化とリスク管理における責任分担である。近年の異常気象による猛暑は、熱中症やけがのリスクを顕著に高めており、第76回大会の主要会場地では会期中ほとんどが酷暑日だったと報告されている。実際に、熱中症53件、怪我62件が発生し、ラグビー競技では脳震盪によるドクターヘリ搬送という重大事故も発生した。このような状況下で、参加者の安全確保は主催者としての最重要責務である。熱中症対策費用については、西医体会計単独での予算化を含めたさらなる検討が必要であり、開催時期の見直しは喫緊の課題として、近年の酷暑を踏まえ、より適切な時期への変更を中長期的に検討すべきである。さらに、各競技に配置される派遣医師は、真夏の過酷な環境下で、日額25,000円という低廉な報酬でありながら、主管校OBを中心とした方々がボランティア精神に基づき協力してくださっているのが現状である。西医体では医師賠償責任保険に加入しているものの、学生の受傷時に派遣医師に過度な責任や負担が集中しないよう、今後は事前説明の充実と関係者間（大会運営委員会、主管大学、派遣医師、参加大学）でのリスク共有の仕組みを整備することが重要である。これにより、万が一の事故発生時においても、主催者側が負う安全配慮義務に基づき、法的な責任の所在を明確にし、迅速かつ適切な対応が可能となる体制を整えるべきである。これは、派遣医師が安心して医療活動に専念できる環境を整備するとともに、大会運営側が予見可能性のあるリスクに対し、適切な対策を講じていることを示す法的要件ともなる。

第76回大会では、これらの課題に対して川崎医科大学の教職員が積極的に運営に関わり、会計や安全管理、渉外などの分野で学生を支援した。この教職員によるサポート体制は学生の負

担軽減に寄与し、大会の円滑な運営に大きく貢献したと評価できる。これは今後の西医体運営における参考モデルとして位置づけられる。この教職員の関与を単発的な対応にとどめず、継続的なサポート体制として確立することで、会計や安全管理など専門性が高く学生の負担が大きい業務において、より安定した運営が実現できると考えられる。また、一部競技（ボート、ヨット、合気道）では参加大学が少なく、主管大学に負担が偏重しやすい傾向がみられたことや、参加人数の多さに対し十分な宿泊施設を確保できず、宿泊地が分散してしまうという課題も指摘されており、これらの点も今後の運営計画において検討が必要である。

先に触れたアンケートで大会満足度が高く評価されたのは、学園をはじめとする多くの企業・団体の協力のおかげであり、その結果として本学の特色が発揮された「思い出に残る西医体」になったと自負している。今後も西医体が医学生にとって価値ある大会であり続けるためには、これらの課題に対する具体的な解決策を継続的に模索し、多角的な視点からのガバナンス強化が求められる。

結 語

西日本医科学生総合体育大会は、医学生の自治・協力・責任感を育成する上で極めて貴重な機会を提供しており、第76回大会からも多くの成果と課題が明らかになった。本研究で明らかにした成果と課題、そしてそれに基づく提言が、大学や地域社会との連携をさらに強化し、負担の分散と支援体制の整備を進めることで、西医体が今後も医学生にとってかけがえのない機会として持続的に発展していく契機となることを強く願う。

利益相反開示

本稿の内容に関して開示すべき利益相反はあ

りません。

謝 辞

本研究の実施にあたり、第76回西日本医科学学生総合体育大会に参加し、アンケートにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。あわせて、大会運営にご尽力いただいた学生スタッフの皆様、そして多大なるご支援を賜った川崎医科大学の関係者の皆様、特に競技主管を担った各部活の幹部・部員や顧問の先生方をはじめ、多くの教職員の皆様には、「おもてなし」の精神をもって安全かつ円滑な競技運営を目指し、さまざまな準備に奔走いただいたことに深く感謝いたします。英文校正に協力いただいた川崎医科大学語学教室のフジシマナオミ先生に深く感謝いたします。

発表歴

本研究の一部は第57回日本医学教育学会学術大会（秋田市）において報告した。

引用文献

- 1) https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2023/3525_01, 帰ってきたスポーツの夏！ 東医体・西医体の夏Ⅱ 2023. 07. 10 週刊医学界新聞（レジデント号）：第3525号
- 2) 第75回西日本医科学学生総合体育大会パンフレット
- 3) 第76回西日本医科学学生総合体育大会パンフレット
- 4) https://m.kawasaki-m.ac.jp/nishiitai_76/, 第76回西日本医科学学生総合体育大会ホームページ (06302025)
- 5) <https://www.soumu.go.jp/toukei-toukatsu/data/io/hakyu.htm>, 総務省：経済波及効果を計算してみましょう (06302025)
- 6) <https://www.japan-sports.or.jp/medicine/heatstroke/tabid523.html>, 公益財団法人日本

スポーツ協会，熱中症を防ごう (06302025)

- 7) <https://m.kawasaki-m.ac.jp/campus/action.php>, 川崎医科大学「学生の行動規範」 (06302025)